

はじめに

2050年のまいつる ～ 森林と木のある暮らし

舞鶴市森林整備計画は舞鶴市の森林・林業の設計書です。

どこの森林に、どのような機能を期待するのか、地図上で明らかにする設計図と、そのために行うべき森の仕立て方を表す仕様書から構成されています。

森林は毎年少しずつ成長し、育成に長い期間を要します。たとえば、植林から木材生産までには半世紀以上、海岸防風林が植林してから実際に効果が出るまでには、四半世紀以上かかります。

なかなかイメージしにくいことですが、ここはタイムスリップの力を借りて、2050年の舞鶴の姿を眺めてみましょう。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ひょんなことから2050年の舞鶴にタイムスリップし、森林を巡るツアーに参加していました。

2050年の舞鶴市は、海と山に囲まれ、風光明媚でにぎわいにあふれた街でした。2016年に樹立した「舞鶴市環境基本計画」、そして、2021年の「舞鶴市森林整備計画」を契機に、自然環境を守り自然の素材を活かす取り組みは、大きく進展していました。

森林地帯は、その場所で果たすべき森林の役割がはっきりと示され、それに合った森づくりを続けてきた結果、とても個性豊かで、市民の生活に密着したものとなっています。

ツアーは水陸両用木炭バスに乗って、西舞鶴駅から出発しました。

（西舞鶴駅周辺の森を眺めて）

市街地周辺の森林は、2021年と変わらぬ佇まいでした。激しい集中豪雨に見舞われたことも何度もあったそうですが、大雨でも土砂の流出を最小限にとどめるように、スギやヒノキの林では間伐を行い、樹齢80年を超える大木が、しっかりと土砂の流出を防いでいました。静かな森は、人が散策に入りやすいように歩道が整備され、市民の健康増進に役立っているようでした。

（加佐地区の林業地帯を巡って）

加佐地区では、大きく育ったスギやヒノキの人工林で間伐を繰り返し、伐り出した間伐材を合板工場に供給したり、品質の良い木材は、舞鶴と綾部をつなぐ「林業専用道」を利用して木材市場に運び出され、まさに適材適所で木材が有効に利用されています。伐採されて穴の開いた所にはその都度植林が行われ、今では幼木群から大木群までがパッチワークのように連なっているところが見られます。こうした植え方により、絶え間なく木材が生産できる持続可能な木材生産林になっていました。

（神崎から瀬崎へ、海から見る森林）

海から見る森林は、若狭湾国定公園の一角をなし、昔から変わらない自然の姿を保っています。舞鶴湾の湾口付近は「魚つき保安林」で、緑の山陰を水面に映し出しています。森林を見守り、必要に応じて病虫害防除や崩壊防止工事などの対策を行う姿勢を継続した結果、2021年と変わらぬ景色が維持されています。

(大浦半島では)

大浦半島は国定公園の森林で、海から続く断崖絶壁の上には、意外なほど緩やかな山並みが続いています。スギやヒノキの人工林に広葉樹が混ざり込んだ、30年前にはあまり見られなかった光景です。ここを巡る遊歩道は、大海原をバックに森林浴を楽しめる道として、市民や観光客の間でも有名です。

(東舞鶴を見ると)

舞鶴湾沿いに大小の木材工場が連なり、近畿地方北部の森林から伐り出された木材がベニヤ板や集成材に加工されて、国内ばかりか海外にも舞鶴港から出荷されています。ベニヤ板を作る時に出る端材や近隣市町村から集められた加工に向かない木は、府内で初めて稼働した木質バイオマス発電所で燃料として活用され、市内の各家庭で電気というかたちで活用されています。木材を溶かして固めたプラスチックのような素材を作る工場もあります。住宅建築やガードレール、街のエクステリアにも木質材料が多く使われ、とても落ち着いた「木の街」になっています。

また、東舞鶴の森林は水源林として重要な役割を担っており、水源の上流では、スギ・ヒノキの木材生産を継続しながら、光を入れて下草を生い茂らせ、地面の保水力を高めた森林が連なっています。

(東舞鶴から西舞鶴へ)

森林経営管理制度が始まって30年が経ち、それまで人の手が入らなかった人工林で活発に伐採され、木材の運び出しが行われています。舞鶴市内の森林は、下草の生える健康な森林になり、水源の涵養^{かん}や土砂災害を防ぐ能力が高まっています。

一巡りして、最後に気がついたのですが、あれだけ山を覆っていた竹林の姿はなく、そこここに小さな竹林が点在するだけでした。何でも、竹を燃料とすることの問題点が解決されたため、市内各事業所の木質バイオマスボイラー用の燃料として、また火力発電所における混焼用の燃料として高カロリーの竹が有効活用され、計画的に使用される竹林を残し、数年で放置竹林はきれいになくなったそうです。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

花壇であれば、春に設計書どおりに完成した現地を見ることができます。

森は完成するまでに何十年もの年月を要する上に、その成長過程も日々の環境そのものです。ぶれない方針を持つ一方で、時代の変化や自然災害からの復旧など長期の変化に対応することも必要です。この計画は、5年ごとの樹立の度に変化に対応し、また変わらないところの確認を重ねることが必要です。

こうした動と静のバランスをとることが、森と人との望ましい付き合い方と言えるでしょう。森林・林業の関係者をはじめ、多くの市民の皆様が森林整備計画に関心を持ち、計画の成長をはかることがもっとも重要なことです。

集落から離れた人工林
低コスト・持続可能な林業

集落に近い人工林
モザイク林化で優良材生産

集落の裏は広葉樹

- ⑦売れる木は少しずつ伐採
- ⑧空地に広葉樹植栽
- ⑨人家近くにはクロモジなどの有用樹を植える

- ④まとめて路網整備
- ⑤まとめて間伐
- ⑥空いたところにスギ・ヒノキを植える

- ①路網整備
- ②小面積の皆伐
- ③谷筋にはスギ・中腹にはヒノキを植える（適地適木）

フォワーダ

プロセッサ

木質バイオマス発電

